

## 第九章 『想像上の避難所』

トマス・ケアリ 著  
朝倉 秀之 訳

この章では事柄を結びつけたり、事柄を結びつけることについて論じることになる。こんな質問で始めてみよう。ダンがお気に入りの主題の中にあるという事実に加えて、天使、ミイラ、マンドレイク、貨幣、地図、影に共通しているのは何か。答えは、それらが反対語の出会い場所になっているように思われる。単語一つ一つが存在するには普通相反する二つの要素が近くにあることが必要である。だから、その性質は一つであると同時に二つでもある。また、右に挙げた項目は、理論で外堀が埋められているので、たいてい問題を孕んでいるか、技法的に複雑なのである。すなわち、それらの片方に注目すると、単純で自然なものから超然としている。それらは概念的な避難所なのである。というのも、一つの避難所は多岐にわたる線や面を結び合わせるが、また出しゃばって線や面を分離させてしまうからである。この二重に機能することがダンにとって

は重要であった。なぜなら、結合している事柄が好きだったけれど、また結合が見えてくるのも好きだったからである。分離と同時に結合もダンに魅了したのである。ダンの想像力を喜ばせたものは、仲良く合体しているこの世の様々な中身の感覚ではなく、結合の内部で生き残っている反対語の感覚であった。一緒に閉じこめられた（すなわち、ジョンソンが不平を言ったこと）で有名にした「暴力によって共にくびきに繋がれた」

二人の敵対者の感覚でもある。

ダンの精神がどのように働いたのかについてT・S・エリオットの一九二一年の記述に欠けているのが、この不和とか気難しさを楽しむことなのである。

ダンにとって思考は一つの経験であり、それは彼の感受性を修正した。詩人の心が自分の創作のために完全に整っているとき、その心は何の関係も無いならばらの経験を絶えず一つにしているが、並の人間の経験は、ごたごたして不規則で断片的である。並の人間が恋をしたりスピノザを読んだりするとき、これらの二つの経験は、お互い関係がないし、またタイプライターの音や料理の匂いとも関係がない。詩人の心の中ではこれらの経験は常に新しい全体（これが「感受性の統合」といわれる）を作り上げている。<sup>①</sup>

ここでエリオットが描き出す安易で感覚的な融合は、実際のところダンのように聞こえない。「ブルーロックの恋歌」のエリオット自身か、ジョイスの方に近い。エリオット自身はこの事実を理解していたように思える。だから、正に引用したこの文章の十年後に書いた「我らの時代

のダン」と言う貶めるような評論の中でダンを自分の原型に十分応えていないと言う理由で非難したのである。この後の説明によると、ダンには「思想と感受性の間に明らかな分裂」がある。今のところ、私たちが知っていることは、ダンが経験を結合しているのではなく、ただ「当惑させるような面白みのある断片を紛れ込ませた」<sup>②</sup>に過ぎない、ということである。言い換えれば、ダンの経験はエリオットが前のところでダンを対比させた「並の人間」と同じように混沌として不規則で断片的なのである。この二番目のダンについての言及は、エリオットの最初の当てこすりと比べると真実からほど遠い。その当惑して言いつくろつてゐる人物というのは、崩壊に逆らつて断片を支えながら、タイプを打ちスピノザを読む人のように、ダンと言うよりもむしろエリオットの言い方であり、一九三二年に自分が成長し過ぎてしまったと感じた一人のエリオットという人物の言葉なのである。

しかし、エリオットの二つの記述は単なる間違いではないで、価値判断した上での間違いなのである。なぜなら、ダンを適切に判断するにはエリオットの記述が矛盾しているように両面からの意味を理解しなければならぬからである。ダンが結合した反対語を想像するのを好んだが、結局のところ反対語はそのままだった。分離と結合を同等に、しかも同時に扱った。この章の初めに列挙したダンの熱狂的な関心事の分類とダンがそれらをどう扱ったかを吟味するならば、このことをさらに明快に見ることが出来るだろう。先ず、天使を取り上げてみよう。天使のさまざまに違った見方は、実際には無尽蔵だった。なぜなら、人が想像したものを制限する注目すべき現実など何一つなかったからである。しかしながら、私たちがダンの詩や説教から天使に関する言及をたくさん集めてみると、ダンの興味が繰り返し狭い範囲で天使の二元性の問題に焦点が絞られているのがわかる。

彼ら（天使たち）は被造物である。肉体を持っているというよりむしろ人間の性情であり泡であり蒸気であり溜息であるのだが、ひとたび触れると、彼らは石の基である砂よりも細かい微塵にし、一里塚の石をひき臼にかけるより細かい粉末にしてみよう。<sup>③</sup>

もちろん、天使の二元性はこれより別の仕方でも感動させる。すなわち、天使は「超初等の流星体」で、神の性質と人間の性質の間で宙ぶらりんになっている、というのだ。「六千歳であるが、顔には年寄りの皺が一本もなく、肺の中には悲しみのすすり泣きすら」ない。しかし、各々の場合、ダンが注意を向けるのは天使である状態の二元性であり、敵対的であるのが自然な要素（若者と年寄り、人間性と神性）の間の歩み寄りを成し遂げる。天使が成し遂げる不可能と見える融合によって自ら「天国の謎」となる、とダンはいささか観察している。美や善のよ

うな単一で簡素な天使の特徴はダンには興味がなかった。天使は何でできていたのかを決める際に、ダンには正反対の見解の間で選ばなければならなかった。スコトウス主義者たちは天使が物質（霊的な物質ではあるが）でできていると信じていたが、アクイナスとその弟子たちはともかく物質でできていることを否定していた。<sup>④</sup> ダンはアクイナスを支持した。ダンがそうあれと願っていたようにアクイナスの理論は天使の矛盾した性質を清潔で汚点無いものとしていたから賛同したのである。そう考えられた天使は、強力で肉体の力を持っていたが、全く肉体というわけではなかった。スコトウス主義者と一緒になつて肉体を天使のものであると決めつけてしまっていたならば、天使を謎として台無しにしていたであろう。ダンにとって天使は自分の詩的なイメージのよ

## 第九章 『想像上の避難所』

うに繋がれない世界を結ぶ結び目だった。

ミイラとマンドレイクはそれらにまつわる不自然に合成されたものがあるという点で天使に似ている。マンドレイクは地中海地方の国々では誰もが知っているジャガイモ科の植物で、生殖能力を起こさせる薬として長く使用されてきた歴史がある。ダンの時代の植物誌には、人の足のよいうな二股に分かれた根を持ったマンドレイクが載っていた。脂肪や小便が死体から滴り落ちる絞首刑台の下に芽を出し、引き抜くときには人の叫び声を発すると言われていた。地面から引き抜くと考えられた人が死ぬと考えられていたから、普通は犬に括りつけて引き抜くと考えられてもいた。抜け目のない行商人たちはブリオニアの根を人間の形に彫った頭蓋骨と顎の部分に大麦とか雑穀の種を入れたりして半ば人間であるという確信を不滅にしていまい、インチキなマンドレイクにちゃんと髪の毛を生やして販売することができた。<sup>⑤</sup> ダンがどこまで信じていたのかは分からない。おそらく、心の中に答えの出ない疑問として残ったかもしれない。というのもマンドレイクを思い描く魅力にとりつかれたからこそ、単に知的な根拠で葬り去ることはできなかったのである。人間と植物が合体したものであり、その神秘的な雰囲気はその合体した不自然さに注目させた。これでマンドレイクは統一の中の不和というダンの感覚では適切な媒体となった。

ミイラについての魅力も同じであるが、結びつける要素は生と死であった。ミイラはピッチのように真っ黒い物体で昔の薬種屋が仕入れて十七世紀には打撲傷や「血を吹き出すもの」や他の不運な傷の治療に処方していたのである。その背後にある医学的な考えにはエジプトの司祭たちが死者の防腐処理を行う際に使っていた瀝青質の調整法に非常な保存力があるのと見ていたにちがいない、だからこそ生者を助けることができたという現実があった。それ故に巻く部分とミイラの中身の部分は中近東

から輸入されていたし、ダンはその製薬的な使用に賛成であると言っている。当時の医学の権威者たちはダンの熱心さには付いていけなかったようで、アレキサンドリアでのヨーロッパ行きのみイラはその場で食の死体やペストの犠牲者から乱造していたことが報告されていた。<sup>⑥</sup> おそらく、ダンはそのような噂を聞いたことがなかったのかもしれない。しかし、たとえ知っていたとしても、たぶんダンはミイラが恐ろしく魅力的だと思いつけていたのであろう。肉体の復活、骨にまわりつく金髪の腕輪、墓石に刻んだ日時計、そのような想像したもので元気づいた精神にとつて、ミイラになった身体が実際に存在していることで夢が本当になったように思えたにちがいない。それは地中にまで下り薬物類に分類されている詩的なイメージなのである。さらに、その生命力を与えるという効力のおかげで、死んでいるミイラの身体が論理的には反対語の合流点だった。それは光と闇が交差し、宇宙の両極地が折り合う地点でもある。

地図というのはあまり神秘的ではないけれど、同じような満足を与えたい、見てきたように、『病床にあって我が神への賛美』の中で死と生の和解を連想させる。

西と東とは

平らな地図上では一つである。(わたしも一つだ)

だから、死は復活に接していることになる。<sup>⑦</sup>

地図はダンにはとても重要だったが、地理学的な目的ではなかった。英国以外の場所に全く興味はなかったし、外国にそれとなく言及するのは、ダンのイメージの系統立てた研究が示してきたように、「希薄で驚くほどに色彩がない」<sup>⑧</sup>のである。地図についての想像力は、ダンに関

する限り、空間をもてあそぶことができる駆け引きにあった。地図は反対語を混じり合わせる知恵だった。地図作成法の慣習から、羅針盤の三十二方位を六角形のアコーディオンのように折り畳むことができた。

平面の地図では、西を東にする方法がないが、極端に遠いとはいえず、その平面の地図を球体の上に張り付けければ、そのとき、西と東は一つとなる。<sup>⑨</sup>

説教集、書簡詩、詩集は繰り返しの考え<sup>⑩</sup>に戻ってくる。地図がダンの心の中で筒のように折れ曲がるとき、夕方が夜明けに溶け込み、生が死を抱き、「無だったもの」が「全て」となった。傷ついた反対語が癒される。すなわち、「一番遠い西が東となり、そこで西が終わり、東が始まる。」<sup>⑪</sup>

ダンの羅針盤の三十二方位の奇妙な使い方は、ジェラルド・マンリー・ホプキンスを感動させたようであった。自ら形而上詩を真似て書いたとき、そのまま写したのである。

地上と天上は、ほとんど知られていないが、わたしの胸から外側に測量される。  
わたしはあらゆる地帯の中心であり、  
東と西を正しいと認める。<sup>⑫</sup>

この連はダンの想像力に富んだマニエリスムにだけでなく、鋭くその動機までも注意を喚起させる。理性と信仰を合一させようと努力するように羅針盤の方位を一つにしたいという願いは、ダン自身の性質の中で分裂を起こしてはいるものの終生の関心事であった。

本当に柔軟性があることに加えて確かに地図はダンを引きつけた。なぜなら、ダンが本当の自分自身になりたいと思っていたように地図は一点に集中していたからである。地図は愛に似て引き締める力があつた。愛は「一つの小部屋を全世界」にしたり、両の手に世界を包むことができた。この理由で図解地図と女性はいつもダンの心の中で入れ替わった。女性は「あらゆる国」である。すなわち、二つのアメリカ大陸、ニューファウンドランド島、香料と金鉱のインド、子午線と入り江と美しい大西洋の中心点のある世界地図である。<sup>⑬</sup> 図解地図のように女性はあなだがベッドから出る必要もなのまま「あらゆる地帯の中心」に置くことができたし、世界の両極を滑らかにすることもできた。

これほど素晴らしい二つの半球がどこにあるというのか、僕らには厳しい北もなければ日の沈む西もないのに。<sup>⑭</sup>

ダンには『おはよう』で恋人の両の目をじっと見つめ、地図と世界のことを考えながらそう要求する。

貨幣と影も、表にあげた別の二つの項目ではあるが、合成物である、とダンは思ったがっていた。ダンは貨幣への執着があつて、貨幣について最初の現存のエレジー『腕輪』を書き、生涯の残りを延々と考え続けた。頑固に強調するのはその二面性である。<sup>⑮</sup> 一片の地金を使って打ち抜き型で結合させ製造したものであり、貨幣は金属の単純な円盤であると同時に抽象的な面を持ったものとして、また価値あるものとして存在するのである。だから、貨幣は肉体と魂の小型化したものである。その押印には物理的実体があるわけではなく、単に表面にへこみがついていくだけなのであるが、その行為が行われる金属に形式と価値を与えることになる。純粹に物質的なものであつたものが「商いの魂」<sup>⑯</sup>となる。

第九章 『想像上の避難所』

この相互作用である物質と霊性とすれば、ダンが貨幣で天使を連想するのは自然なことであつたし、当時の英国の貨幣は実際に天使と呼ばれていた事実は幸運な偶然の一致であつた。だから、ダンは『腕輪』や他のところで利用しているのである。

影はさらに天使に似ているといつてもよい。なぜなら、実体はないが見ることはできるからである。影をただの光が奪われているというように非存在として考えることができる。あるいは、濃くなつた空気と考えることもできる。トマス・アクイナスとダンの中で天使がしかめつ面をしたり、翼を作つたりする空気のように。影の論争になるような性質はダンの気質に合つていたし、一つの見解を取つたかと思えばまた別の見解をとつたりする。「影は無である」とダンは述べる。あるいは、代わりに影は「濃い光」である。あるいは、影は「全く光がないのではなく、生氣のない水っぽく薄くなつた光」<sup>①</sup>であると云つたりする。影はその存在を探索するとき、不確定であるだけでなく中間物でもある。あるいは、光と闇との間の非存在でもある。そしてこれもまたダンが靈感を受けた形而上学的な「あいのこ」の間で包括しようと影に資格を与えたのである。

\*\*\*\*\*

もちろん、今まで見てきた一覧表は、代表的なものにだけで完全ではない。他の項目を足すことは簡単であろう。例えば本書の中ですでに触れているスポンジとかゼリーであるが、液体と固体を調停していいし、「反射する石」とそれを使って作つた温室は透明性と入り込めないことを兼ねている。これら全ての興味の根底にある結び合わされた反対語の原理がダンの詩に染み渡っている。ダンは結びあわせることで仕事をする。

しかし、結合物で悩まないうちに分離で悩まなければならなかった。東と西を努力して統一しようとする精神は普通とは違う形でそれらの分離を意識しなければならぬ。なぜなら、人々の多くを混乱させる事柄ではないからである。ダンの夢は接続しないという理由だけで結びつき、ダンには根から分析癖があるという理由だけで統合した。努力して克服しようとしたが、分裂状態を作り出してしまった。

ダンをも最も興味深くさせた統合は微妙で複雑なものであつた。すなわち、その関係は親密かつ深遠である。想像上の避難所である。例えば、『エクスタシー』の中の恋人たちの手は

粘着力のある香油で  
しっかりと結ばれていて、

初めに現れている以上にかなり入り組んでくつ付いている。「結ばれている」という言葉は個形体が高温で互いに浸透し合うという錬金術用語であつたためではなく、パラケルスス医学の「香油」は身体全体を通して発散され偉大な治療力を持つた一種の揮発性の液体でもあつたからである。ダンがこの自然の香油（また「バルサム」や「バルサムス」とも呼ばれていたが）に頻繁に言及している。ダンにとってその微妙な実体は肉体的なものゝ霊的なものを融合させた。

もし人が指を突くだけで、その突いた部分に指を固定するならば、その結果、霊気、すなわち、身体の中の香油と呼ばれているものは、その絆のゆえにその部分に下つてくることができなくて、その指は壊疽になつてしまふであろう。<sup>②</sup>

医学的な理論が、香油とミイラを結び付けた。なぜなら、香油は死者から抜き取られ、ミイラは香油を含んでいると信じられていたからである。だから、その恋人たちは「墓の石像」のように横になつて両手を握り合わせ、医学の錬金術的な生命維持装置によつて結び合わされ、生命力に溢れた香油を互いに輸血し合う。

引用した文章の中でダンにはパラケルスス派医学の香油を用いて半ば確認する「靈氣」はダンの注意を引くもう一つの結合の代理人である。十六世紀のガレノス派医学の生理学の流れの中でその機能は精神と物質の間の中間地点であつた。この理論によつて血液が循環するのではなく心臓の右側の膨張と収縮の結果として血管の中で引いたり満ちたりしたのである。食べ物が消化されると、肝臓は「自然の靈氣を分解し、その靈氣が血液と共に通過して、心臓の右心室に入り、中央の隔壁をとおつて、左心室に入り込み、そこで肺から空気で混ぜ合わされて、精製されて「生命力のある靈氣」となつた。動脈を通して上部へ続いていて、この靈氣はそれぞれ脳の中でさらなる精練に耐え、そこで事実上精神から軽さと希薄さの中で見分けがなくなつた「動物的な靈氣」となつた。それから脳は動物的な靈氣を神経にそつて筋肉に向かわせ、そこで膨張の過程により筋肉の収縮の原因になり、そこで手足を手術した。

このように見てくると、人間の身体は錬金術で使用する実験器具のように本質的には蒸留器であつた。ダンには人間の身体はかなり同じような魅力を持つていて、毒氣、吐息、憂鬱症、広く肉体から発散するものへのダンの興味を喚起した。しかし、靈氣は天使のように分離した世界の中で説明しているがゆえに特別に魅力がある。ダンにとつて靈氣は説教の中で説明しているように、生命力を持った人間の一部分である。

自然の人間がどのように作られているかという点、その身体が人間でもないし、その魂が人間でもなく、この二つが結合すること人間となるのである。すなわち、人間の靈氣は血液を薄くしたり活発にしたりする役目がある。だから、一種の魂と肉体の間であり、その靈氣は肉体の器官に魂の機能を結合させたり、利用したりするためにその役目を果たすことができるし、また果たすのである。そこで人間となるのだ。<sup>19</sup>

結合に向かつて行こうとする想像力は『エクスタシー』の中でのようにここでも同じである。そこで、愛する際に肉体の器官に魂の機能を利用したい妥当性が力説される。

僕らの血液は魂によく似た

靈氣を創り出そうと努める。

そんな指だけが人間にしてくれる

微妙な結び目を作る必要がある。

だから純粹な恋人たちの魂は

感覚でとらえて、把握する愛情と

働きにまで下りてゆかなければならない。

でなければ偉大な王も獄の中。<sup>20</sup>

しかし、この有名な連は、単なる実り豊かで勝手気ままな結合ではない。ここはまた、結果的には克服しがたい障害を克服しようと努力することについても語っているのである。血液が苦勞して創り出そうとする靈氣は、なんとかしてできるように魂に「似て」はいるが、魂ではない。肉

## 第九章 『想像上の避難所』

体の（「指」）であることすらなくて、全く魂ではないのである。詩行の中で出来そうもない努力を要する表現は結合を力説しているときですら、分離の感覚を生かしている。見てきたように、これは顕著にダン風なのである。

霊気は肉体と魂を結び付けるが故にダンには重要だったし、次には私たちが気付いていたとはいえず、なぜダンがそんなに神経に夢中になっていたのかをさらに明確にすることになる。というのも、神経は肉体のいたるところを通っている結合力のあるネットワークとして機能していたし、経路を留意しそこを通して統合しようとする霊気は脳から筋肉に到達した。意味ありげにダンには神経をほめかすのに肉体を動かすもの（ガレノス派医学の中では究極の目的であったけれど）とは考えず、肉体を感じさせることすら考えていない。むしろ、霊気は肉体を弦のように束ねていた。そのように強調することでダンが個人的な分裂と『埋葬』の中で述べるように「ダンの「各部分」を「結び付け」、一つにするものの必要性和を心配していたことを目立たせている。

これに連動して、その連想は初めはそんなに明確でないかもしれないが、ダンが一番魅了してきたように思えるあらゆる肉体的な作用のうちでもダンが特別に消化に言及しているのである。ダンには消化機能の用語を用いて幅広い様々の過程を特徴付けているのである。それは教育から神についてのキリスト教信者の経験にまで及んでいる。私たちはダンが観察するように規則と例証によって新知識を必要とする。「まるで同化することでそれが肉になる。それを以前私たちの肉体の中にある各部分のように私たちが食べて消化したからである。」あるいは、二者択一的に「私の肉は私の肉体に同化され、それで一つの肉体になったように」、「私の魂は私の神に同化される。」あるいは、またキリストを思い描くことで「確かに輸血され、移植され、霊魂が輪廻し、変容して自分にな

るのである。（というのも、良い消化はいつも同化をもたらすからである。①）肉体の復活を論ずる時、人間が魚に食べられてしまったたり、他の人間にその魚が食べられてしまった状況について述べるダンの熱心さは同じ想像力と繋がっている。ダンの消化の強迫観念の鍵は「同化」という言葉を再現させる使い方にある。というのは、ダンの見解の中で胃についてのびつくりする説は、胃が食べ物と食べる人を非常に密接に結び付けるから食べ物を食べる人になるということだった。胃は結合させるというよりもつと良い完全に混ぜ合わせるものであった。というのも、そのことが人々を結び付けるとしても、人々は後ではばらばらになることができるが、消化は逆にはできないからである。おそらく、この胃の忠実な影響力についての感情で共食いをする意味合いを説明できる。それは一般に情熱的な愛と通じている。「あなたを食べてしまおう」と私たちが言うのは、全部を所有したいという意味になる。同じ声に出して懇願するかたちはダンの中で起こる。ダンが女の魂を熱心に食べたり、女の「甘い涙」を飲んだり、胡桃のように女を噛み砕く。

恋人を変えるのは果物を変える過ぎない

果肉を食べたあとその殻を

捨てない者がいるだろうか。②

この詩行の青年期の空威張りの背後にそれを食いつくすことで外側の世界を所有したいという望みが潜んでいる。母親から分離する際の子供の最初の命の経験に呼応する。ダンが詩と散文の両方の中に「吸う」という言葉を好んで用いていることは注目に値する。人間は「地球の甘さと他の人々の汗を吸う。」英国国家は貿易によってお金を「吸い上げる。」③ 消化のように俗と聖の著しい範囲の文脈の中に組み入れられる。

神は魂を吸い、蚤は恋人たちの血を吸う。吸うことは「肉が私たちの身体になれる」<sup>23</sup>という「あらゆる消化と調合」のように最初に吸収する行為である。だから、それがダンの宇宙の卓越性であり、そこで吸収が存在する目的の一つとなる。

どうしても反対物と繋ぎ合いたいと思う気持ちは一つ一つのイメージの中にも、詩全体の構成の中にも見られる。特徴的なダンのイメージは「金箔にする黄金」のように物質的であると同時に非物質的であるものを描写したいという欲求の表れである。さらに大きなスケールの『エクスタシー』、『空気と天使』、『別れ―嘆くを禁ずる』、『日の出』、『夢』はすべて反対物と妥協したり和解したりする道に到達する。『エクスタシー』は肉体を魂と和解させているし、『空気と天使』は全体的に実質のない愛と実質が大いに煩わせている愛との間で妥協することを求めている。『別れ―嘆くを禁ずる』は不在と在宅を和解させる。『日の出』はこの世を失うことと手に入れることは同じであると告白する。『夢』の中では目覚める人生と眠る人生は区別されているのではなく、重ね合わされている。女は夢に溶け込み、夢は女に溶け込む。「僕の夢を君は破らずに、続けていてくれる。」<sup>24</sup> あたかもダンがこれらの詩を反対物を同時に所有することを意味する変換することのない究極の解決不可能な問題のさまざまな処方せんとして考えだしたかのようである。

想像上の隠れ家の詩人としてダンはまだ明らかに単純な状況によって魅了された。その状況を検討したとき、半分に分離して必然的に相互依存とか相互作用として表現されていた。例えば『魂の遍歴』の中で魚について話すとき、ダンはその方法を記録する。

砂に産んだ雌の魚の卵が

雄のジェリー状の白子をかかけられ今受精した。  
泳いでいたとき、ちょうど相互に触れ合ったから。

大抵の詩人にとって「相互に触れ合う」という単語は、不必要に凝って作られた動詞のように思えるだろう。二つが触れるか、触れないかのどちらかである。しかし、ダンにとって魚でも雄と雌の親密に接近するには、触れ合う二つの方法を含んでいる。生き物は各々触れたり、触れられたりする。その単純なぶつかり合いは、二種類の接触と二つの相反する種類の接触を含んでいる。なぜなら、一つは能動的であり一つは受動的である。魚の間でダンは自分の想像上の隠れ家を挿入する。このような相互関係へ目を向けることでダンは「相互に」という接頭語のついた動詞を特に発明しやすくなったのである。「我々がお互い相互に任せ合う要点は」とダンが『似非殉教者』の中で書き、「彼等は各々相互に告発する同じ欺瞞」と続ける。ダンの描く恋人たちは「二人の心を相互に確かめ合っ」ていて、二人の愛は「二つの魂を相互に動かす。」暴君と臣下は『呪い』の中で「相互に呪い合う。」サマセット伯爵の結婚式の時に書いた婚礼歌の中で「祝福された二羽の白鳥」が「日々新たな喜びを相互にもたらし合うように」<sup>25</sup> 命じられる。与えられ、受け入れられる相互の行為は、恋人たちの握り合わされた両手の間を通り過ぎる香油のようであり、二人の縫い合わされる視線のようである。相互に任せ合うことで結び合わされる。その点でダンが自分のための真剣勝負として詩の中に探し求め続けているいつもの愛に似ている。――「だから、君の愛はぼくの軌道になる。」<sup>26</sup> ダンの接頭辞の選び方と鑄造貨幣の型を並べてみると想像の仕方は、結局のところ情緒的な要求で決定される。一つの動詞の中の能動と受動が微妙に容認されることでダンは満足する。なぜなら、ダンのこの世を秩序付ける助けになっているからであり、「バ



## 第九章 『想像上の避難所』

ラバラになつた廃棄物」<sup>⑧</sup>（ダンが『第二周年詩』でそう呼んだのであるが）からこの世を救い出し、結合と相互関係でこの世を一杯にしているからである。

親密で微妙な結びつきを探究することがダンをお互いに愛を交わす二人の女の主題に引き付けられたことだつたように思われる。『サッフオーからフイレニスへ』は英語で書かれた最初のレズの恋愛詩である。明快な感覚に訴える情景が意識の底の鏡のように双児の世界とイメージで泳いでいる。

お前の柔らかさ、眩しさ、真つ直ぐな姿、色の白さには、

羊の毛も、星も、杉も、百合も、はるかに及ばないわ。

お前の右の手、頬、瞳に比べられるものがあるのなら、

それは他にはない、お前のもう一つの手、頬、瞳だけ、

私の二つの唇、瞳、股は、お前の二つのものとは違う。

でも、お前の唇、瞳、股が相互に違うほどでもない。

いいえ、それ以下だわ。それほど似ているものならば、

似たもの同志、お互いに触れ合ってもいいじゃないの。

他人だつて、手と手を合わせ、唇と唇を合わせるもの。

それなら、胸と胸、股と股を合わせても悪くはないわ。

似ているから、奇妙な話だけど、こんな自慢がでるの、

自分に触れば、お前に触っている気分になれるなんて。

自分で自分を抱き締めたり、自分の手に口づけをして、

ああ、有り難いことだわなんて、自分に感謝するのよ。

鏡に映った自分に、お前さんなんて呼んでみるけれど、

口づけをするなら、目も、鏡も、涙で曇らしてしまわ。⑨

（湯浅信之訳）

サッフオーが夢見るように力説して描く合一は、一度離れて同じでもあつた二つの肉体を保証する。あまりに似ているのでサッフオーは自分に口づけをしているのか、フイレニスにしているのか分らない。あまりに離れているので全体の詩はサッフオーが鏡の前で自分に触る間に語られる。フイレニスはそこにはいない。しかし、彼女はそこにいる。なぜなら、サッフオーが自分の身体を感じるときに自分を感じるからである。二人の女は離れているのに完全に結び合わされている。なぜなら、二人は一つの身体、すなわち、サッフオーの身体に住んでいるからである。自分自身に愛を交わすとき、サッフオーは普通の人間の恋人たちが決して征服できない二元性を逃れる。愛されるものと愛するものを溶かし込み同一のものとする美しい混乱は、『エクスタシー』の中の相互に行き来し合う魂の合一の肉体的な複製である。その『エクスタシー』はまた解き難いほどに融合されてしまい、その結果聞き手はもはや二人の声を聞き分けられなかった。「なぜなら、二人は同じ内容を話しているからである。」その事柄のためにサッフオーは鏡に映る「お前」としての「わたし」を見ることは明らかに「君はぼくを見る。ぼくは君となつて。」を思い起こさせる。そして、サッフオーの不在を在宅にしてしまう臨機応変の処置によつてその独白がダンの他の詩と繋がることになり、別れた恋人たちがまだ一緒にいることを示そうと努めることになる。

「サッフオーからフイレニスへ」とダンの執拗な関心事が一致するのは、注目に値する。というのも、現代の編集者ヘレン・ガードナー女史は主題や扱い方や文体にしてもダンらしくないと見ていて、その結果、詩の初版本や種々の信頼に足る原本に出ているのもかかわらず、その信憑性まで否定している。「わたしはダンが同性愛者のサッフオーの恋人を慕う気持ちを当然と願っていると想像するのは難しい」<sup>⑩</sup>とガードナー

女史は述べている。他方で、ダンが二つの同一が一つになるように恋人たちの合一をあまりにも完全に描写したいと願っていると想像するのは、この上なく簡単であるし、ダンが二つの厳密に同じ肉体について書かなかったならこのようにはできなかつたであろう。サッフオーの同性愛は、想像上の問題に対する答えとして押し進められた。

区別をなし崩しにし、東と西を一緒にして溶け込ませようとする本能が、ダンの難解な比較の趣向に潜んでいて、生命力のない対象物を活気づけるためのダンの嗜好にも表れている。一对のコンパスと恋人たちの比較を取り上げてみよう。これで不愉快になつたジョンソンは、優位を占めているのが「非常識なのか巧妙なのかと疑つた。」<sup>②</sup>しかし、そのジョンソンが反対したことであるが、その特異性は、比較される要素に属さないのである。グアリーノは、前に指摘されてはいたが、ダン以前に一对のコンパスの脚と離れている恋人をなぞらえていた。ダンが結び合わせるエネルギーで貢献するのは、比較ではなく同化である。コンパスが生命を持つのは、二つの魂の動きをその振動を通して表現しているからなのだ。

もし僕らの魂が二つなら、固い

一对のコンパスの脚のように二つである。

きみの魂は固定した脚で動きを見せないが、

もう一方が動けば、動きを見せる。

きみの魂は中心に座していても、

もう一方が遠くへさまよえば、

そちらに傾き、耳をそばだて

帰ってくれば、直立する。<sup>③</sup>

コンパスを心に浮かべ生命を与えるという扱いの上手さは、実に驚くべきことである。それはダンの動詞の使い方なのである。固定された脚は「傾き、耳をそばだてる。」まるで恋人についての知らせを手に入れようと思慕の念で耳を傾けているようである。動き回っている脚は「遠くにさまよっていく。」——そしてその動詞が脚に音を出させるのである。実際に、一枚の紙の上の円を描くというよりも人跡未踏の荒野を旅しているかのように。範囲はそれぞれに広がる。振る舞いが優雅で滑らかになり人間となる。ダンにはコンパスに感情移入し、感情をコンパスに授けている。グアリーノの中にはこれは無いし、ダン以前のコンパスを用いた他の詩人たちの中にもない。<sup>④</sup> 詩人たちは整然と緩慢な比較をする。ダンには相互に滲み込ませ、生命を与える。

私たちがすでに気付いていたことではあるが、例えば、窓ガラスに刻み込まれた「骨のようにきざぎざした名前」が必要とする不安な心の変化、あるいは、ダンが黒玉の指輪に話し掛けるのに用いる気づかいの中にこの活気づけようとする傾向があつたのである。また必ずといってよいほどその人間的な装いでダンに感銘を与える一つか二つの共通の対象物があつた。ろうそくと貨幣はこの範疇に入る。ろうそくの炎の種類とその大きさを通してダンの中では明瞭な表現と振る舞いが出ている。「すると君の病めるろうそくの光りはウインクし始めるだろう」とダンが女に『幽霊』の中で告げると、その瘦せてがたがた震えるものはその場で反応して幽霊となる。また、「問題」の一つは、安っぽいろうそくが光りを放つ不健康で敬虔な個性とピューリタンの教えを比較することでの教えを際立たせている。「瘦せ細りみじめで病氣の見張りであるろうそく、生氣もなく最初から神聖な消耗の中にある。」<sup>⑤</sup> 比較すると、『背教者』の中のろうそくは悪意がありエロティックな色目をこれ見よがしに使う。

## 第九章 『想像上の避難所』

蝋燭のキラキラと輝く目は、

魅力たつぷりに瞬いて、目が眩んだ蛾を招き寄せると、

その羽を焼いてしまう、<sup>⑧</sup>

(湯浅信之訳)

だから、ダンが『聖列加入』の中でぼくと彼女が「ろうそくである」と宣言するとき、ろうそくに人々が同化することで定着した性質になる。もちろん、ダンの時代のろうそくは、現代の生産方式で作られ出される個性のない筒状のものよりかなり一定化されていなかった。一つにはろうそくで作られたものと獣脂で作られたものとの間の初歩的なランクの違いがあった。この区別があまりにも厳密であったからロンドンには商売をする二つの方式を制御するためにワックスチャンドラーズとタローチャーンドラーズという二つの区別した同業組合があった。しかし、ろうそく作りは決して単なる商売ではなかった。かなりの数の促成で出来た国内中小工業が進んでいて、料理の残飯から純化した獣脂を使っていた。ダンは明らかに好奇心をそそる主題を見出し出していて、「締まり屋の娘」が台所の料理の残りを削り落とし樽につめてろうそく製造販売人に売って、自分の嫁入り道具を買う助けにしようとダンの二番目の諷刺詩の中に登場する。

エリザベス朝の硬貨鑄造は、また極端に同一基準になっていなかった。なぜなら、打ち出しの初歩的な技術で作られていたからである。機械化された硬貨鑄造は英国ではほとんど知られていなくて、その後クロムウェルが導入したのである。<sup>⑨</sup> くつきりと浮彫り細工が施されざざざの縁取りがついた完全に丸いクロムウェル硬貨はただちに当時の通貨として認知され、それに引き換え、エリザベス朝造幣局の潰れて不規則な

製品は同種の偽物に見える。しかし、杜撰だったからこそ詩的に役に立ったのである。なぜなら、硬貨には人々の果てしない個性があり、そこに施された人間の顔に加えて、このことはダンが硬貨に生命を与えるのを勇気づけたからである。そこでダンは刻印がずれていたり、再度打ち出されている硬貨が「歪んではみ出して」<sup>⑩</sup> いるように見える、とグッドイヤー宛の手紙で述べているし、ダンが『腕輪』の中で街の叫び屋が雇われるのに使われる硬貨を「痩せこけた一枚のグロート硬貨」と呼ぶとき、私たちは敏感で際立った暗喩が、外側の世界に人間的な興味を付与しながらも、ある程度ダンが生きた時代の遅れた節操のない技術の産物であったことを認識すべきである。

しかしながら、ダンの生命を与えようとする気持ちがあまにも健全であったから、おそらく現代の条件の中でさえ生き残ったのであろうというのも本当である。ダンは機械で作られたものをろうそくとか硬貨のように自然に擬人化されたものにすることができた。「ハリントン卿の葬儀」の中で高度なチャールズ・デイケンズ風の時計を証拠とすることもできた。その時計は歯車の中で「異常と不調」を感じ、長針と短針の中で「震える中風」にかかり、様々の他の病のまっただ中で止まってしまふ。<sup>⑪</sup> このように想像する傾向があると仮定すれば、ダンの『魂の遍歴』という叙事詩のための主題がどうして選ばれたのかは理解しやすい。ダンが宗教を諷刺する可能性についてどんな風に感じたとしても、その骨組みの基本的な魅力はたくさん異なった野菜や動物の意識を持つたふりをする必要がダンにはあったということだった。ダンは書簡詩の中で読み手に説明をしているのだが、きのこやメロンや蜘蛛や早馬に似ていたものを描写していた。まるでダン自身の魂がこれらの生き物に住み着いてしまい、その経験を覚えていいることができるみたいである。<sup>⑫</sup>

ダンが生命を吹き込んだ硬貨やろうそくは一つの種であり、その存在の混乱した様式を繋いでいる微妙な結び目は、ダンが時を観察する際にも認められる。ダンは瞬間で引き付けられる。詩人は、次のようになると思ふことを好んみ、

天国とカルヴァリーの丘、

キリストの十字架とアダムの木は一つところに立っていた。<sup>④</sup>

また、同質の話題である『同じ日に起こった受胎告知とキリスト受難について』<sup>⑤</sup>を発見した。「私は極端を嫌う」とダンは『秋』の中で書き、その代わり成長と崩壊という反対物が出会って、宙ぶらりんになる<sup>⑥</sup>時のような秋を選んだ。同じような好み色彩、かなり後に、死後についてのダンの描写。「天国では、最初の瞬間に果物は熟し、天上ではいつも秋である。」<sup>⑦</sup>即座の秋の果物の概念は、新鮮であり同時に熟慮されて、すでに『魂の遍歴』の中の重要な天国の側面であった。そこでその運命を決するりんごは、

果樹園の王、明けゆく朝のように美しく

律法の壁に守られて、生まれるやいなや熟れている<sup>⑧</sup>

エデンの園か、それとも天国で成長するのかどうか、これらのりんごは想像上の避難所である。天使のように若さと老年を合わせ持っているから。

もう一つの想像上の避難所は、永遠である。それはダンに合っていた。なぜなら、巻き上げられた地図が空間の区分を無くすように時の区分を無くしたからである。永遠には「区分も、限界も、期間も、季節も、月も、年も、日も無い」のだ、とダンは会衆に思い起こさせた。天地創造と最後の審判は「永遠については離ればなれの時間ではない。永遠には瞬間などないからである。」<sup>⑨</sup>だが、永遠はダンにとつて持続する時間でもある。永遠を測り知れないほどの長時間として想像していたようであり、どういうわけか、通常の時間のように間隔ごとに細分化されないものであった。従って、ミイラとかマンドレイクのように永遠は同じ結合力のある本能を満足させたのである。なぜなら、信じ難いほどに拡張していく考えと分割できない考えとを結び付けたからである。永遠は、全てのうちで一番想像できそうな想像上の避難所である。『ソングズ・アンド・ソネッツ』の中の愛は、その同じ目的に仕えてきた。

変わらぬ愛はどんな季節もどんな天候もない。

何時も何日も何月も全てはみな時のぼろきれ。<sup>⑩</sup>

愛は持続するが、持続する時間はない。というのも、持続する時間には時が含まれているし、愛には「明日も無ければ、昨日も無い」のだから。愛は過去と未来の両極を溶かし、時は東と西になる。

同時性と「時間、日、月」のような連続したものを跡形も無くすることが、目標であった。それが逆説と圧縮のためにダンの劇的な趣向にも合っていたのである。魂が全て天に昇り、過去が全て不思議な力で現在となる「最後の審判の忙しい日」を切望することが、結び付け凝縮する意図

## 第九章 『想像上の避難所』

を持つ宗教的な領域の中で表したいだけだった。それがダンの思想と詩の全体を通して広がっているのである。愛が一時的に欠けるのは、ダンが『影についての講義』で女に警告することであり、望むことのできない結末としてその詩の虚構性の中に提示されるが、詩的出来事としてダンにとって引き付ける力がある。なぜなら、愛は天国の果実のように強制的に特定の期間では反対物であるものを壮観な連合体としてしまうからである。

愛は育っていくもの、すなわち変わらぬ全き光。

正午を過ぎれば一瞬で、夜。<sup>⑧</sup>

天国に相応しい果実は一瞬にして熟れていた。ところが、愛は一瞬にして死んでいる。偶発的なものは様々あり、異なった文脈に順応するが、同時性の魅力は持続する。

永遠と最後の審判についてのダンの強調点は、この魅力から派生する彼の宗教的な感受性の中の唯一の要素ではない。魂の創造と原罪の継承についての非常に重要な神学的疑問に関して、ダンは率直に同じ想像的な興味を表明する教義を選びとるように観察されるかもしれない。

魂の創造に関して、二者択一の予定表はキリスト教著作者たちによって提出された。一つの見方は、神が天地創造の過程の初期段階で人間の魂を十分に補足して完全にするものを創り出して、その後、魂は宙ぶらりんの状態で留まっただけで最後に地上での生命を受ける順番が回ってきたとき肉体と組みになったというものであった。別の理論は、聖アウグスティヌスによって押し進められたのだが、魂はそれぞれ人間の胎児

の中に入る瞬間に分かれて存在するようになった<sup>⑨</sup> というものであった。そこで、魂は胎児に入り込む過程は論争のさらなる主題であった。西欧の教父たちは一般的に両親によって増殖されたという信念を忠実に受け継いでいた。例えば、テルトゥリアヌスは人が性的興奮の後ただちに視力がぼんやりして不明瞭になる経験をする理由は、人が精液の中に含まれていた魂の一部が丁度失われたからのだ、<sup>⑩</sup> と説明した。ミルトンもこの教義が気に入っていた。なぜなら、神が個々に新しい魂を創造して注入したという既存のものと違う意見を彼は不穏当であると思っただからである。もしも神が人間の好色な情熱で生まれた肉体に入り込ませるために毎日新しい魂を創らなければならないなら、嫌な作業になるであろうし、安息日でさえも神が休息を赦されなくなってしまう、<sup>⑪</sup> とミルトンは論じた。ダンには自分の位置を明確に述べる時の段階で遺伝と注入の両理論に精一杯の異論を見た。そしてダンはグッドイヤー宛の手紙<sup>⑫</sup> にそう略述している。

さらにその問題を複雑にする原罪の事柄があった。西欧の教父たちや東方教会のニッサのグレゴリオスはアダムの罪は両親から受け継がれ遺伝した魂の中で固有であると見ていた。しかし、東方教会の教父たちはジェロームとヒラリーと共に肉体の中に原罪を宿し、それが魂に影響を与え、魂の相違もあつた。原罪が墮落する結果をもたらすことについて意見の相違もあつた。原罪を全く軽く考える権威者たちもいたからである。論証とか合理的に影響を受けない主題についてのこのきちんと整理された対立する主張に直面してダンは論争の中の以前の仲間の例に従って自らの想像に最も愉快な解決策を選択した。彼の主張では魂が神によって個々に注入され、魂と肉体の合一が原罪になる瞬間が以前に魂にも肉体にも存在しなかったとしても、存在する。それが全体に墮落していることになる。同時性に捉えられた精神と反対物を一点に集めようと

する傾向にとつて、この主題は二つの世界の最高のものを提示した。遺伝よりも注入されたことを選ぶことで肉体にとつて入り口での魂の純粹性が保たれ、一方では、注入された途端に魂に襲い掛かる完全な陰鬱と対照的な最大限を提供した。このように両極端が出会い、東と西は互いに抱き合う。

この複雑な話題についてのダンの論点を一致させることで、彼の想像力が追跡することを好んだ様式と共に、私たちはダンがかつて解釈した教義を信じ込ませる熱心さを理解するのに役立つ。これはさもないと奇妙なものとして私たちに映るかもしれない。というのも、以前のようになんは人類全ての弁解の余地のない腐敗を確実にした議論をすばらしく整頓することで拍手喝采を得るために私たちを訪れているからである。

どんな矢筒からかは私には分からないが、ここで矢がとても素早くやってくるので、私たちの生命の最初の一分の中、すなわち、私たちの母親の胎の中で生命を与えられる矢のように、私たちは六千年前に犯したアダムの罪の故に罪があり、その矢全て、すなわち、飢え、労働、悲しみ、病氣、死に縛られている。それらは罪の後にやってきたもの、……。この矢である原罪がとても素早いので、そこから続いて起こってくる誘惑の全ての矢が放たれるが、私が生まれた最初の一分以内に來る神は、死ぬ前に來ることはできないのである。<sup>(55)</sup>

昼が過ぎて私たちの最初の一分は夜である。同時であることの心の高ま

りは、反対物を融合するので、ここでは誤解の余地が無い。その時ダンには自分たちを滅ぼしてきた飛び道具の想像できないほどの素早さを用いて会衆を動揺させる。その主題の事柄にも係わらずその調子は、大喜びである。そして、それはダンが神学を研究することで想像的な遊びのために自らを自由にする方法を発見したからである。何度も説教は私たちの創造と破壊についての即時性を高く評価する。

肉体は罪がなく、魂は罪がないが、この肉体と魂が出会い、結び合わされる最初の一分に、その瞬間に私たちは、六千年も前に犯したアダムの罪で有罪となる。<sup>(56)</sup>

微妙な難問を抱えて私たちは墮落した人間となつてゐる。詩にしばしば出てくるように、肉体と魂の神秘的な結合は、ダンが混ぜ合わせようとする強迫観念の中心に存在する。さらに、その結合は愛の行為であり、それが引き起こす込み入った結合でもある。ダンはここではもはや愛の詩人の立場でこれらの事柄について書いてはいないが、それがダンの想像力を刺激しているのは確かである。子宮という「中心の部分」、胎児の成長、靈力を生み出す血液、ダンの精神は、なおこれらの感覚の領域の回りを回っている。『エクスタシー』や『魂の遍歴』で中で胎児の発達の記述で巡らせたのと同じ働きである。ダンが今一心に溶け込もうとすることが恋人たちが溶け込むように、受胎した瞬間の母親の体内で起こる。愛の働きのように的確な作業行程は知ることができない。

「最初の一分」という語句は、お分かりの通りこの一連の文脈の中で再生し続ける。まるでその目的を成し遂げた響きが奇妙にダンには十分に

## 第九章 『想像上の避難所』

あるかのように。ダンはその振り回したり、修辭的な期間の最後に切り札のように投げ掛ける。

十分にあなたの魂に神の審判がすばやく下らなかつたのか。魂が創られ、考え出され、融合されたその同じ瞬間に、魂は原罪を引き受ける必然へと向かい、そこでアダムが神に背いた刑罰に服従することとなつた最初の一分だつたのに。<sup>⑤</sup>

ダンには会衆の墮落に触れて実は自分自身のことを話しをしている。しかし、誰もその話し振りからそのことを推測するものはいない。今挙げた例証を通して印象に残るのはダンの幸福感である。ダンには会衆を煙に巻くような数学的な証明をとうとうと述べる人という雰囲気があつた。会衆への優越感がみえみえである。無知であること（「誰もわたしに、と言うものはいない。」）をくどくど話すことで会衆をなじつたり、口やかましく問うこと（「神の審判はあなたの魂に十分に素早く執行されなかつたのだろうか」）で会衆を抑えたりした。まるで（もちろん、ダンが考え始めたとき）自分で最後の審判を考え出したかのように語り、その考えの才能に酔っている。征服者、奇術師の口振りであり、共に苦しむ仲間のものではない。その主題でくつろいでいる精神とその説明を楽しんでいるのを感じる。ダンの基本的な興味への神学の調整が完全に成功した印である。

本書が扱ってきた他の全てがこの第九章に関係し、その範囲に入つてくることが結局のところ、指摘することになるし、これを直ぐに指摘する

ことができる。ダンが生命力に溢れたものと不活発な解剖学的な塊り（「生きている壁」）との両面を持った肉体に気づいたことは、第五章で論じられたが、明らかに精神の習慣と関係している。同時にそれはこの章で考えてきた二元論的であり統合的である。第七章で吟味された広範囲に配列された工夫も関係している。その工夫でダンは生きていることと死んでいることが同時に可能であることを展開している。第八章で解明された理性と情緒が互いに浸透し合うダンの感覚も同じである。このように全てはダンの精神を引きつけるその種の想像上の逃げ場を醸し出している。

第六章で研究された変化についてのダンの先入観は同じ興味と一致している。なぜなら、実際に想像上の逃げ場に向かつていて他のものになるものを必然的に伴っているからである。さらに、ダンがアリストテレスやトマス・アクイナスから受け継いだ世界的な見解の中で、変化は反対語の結合から分離できないと思つている。なぜなら、不揃いの要素を結合するものだけが変化するのだ<sup>⑥</sup>と信じられているからである。ダンは自分自身の変化できるものを自分の性質（「ああ、わたしを悩ませるために反対語は一つになる」）の中で調和しない要素と結びつけ、自分の精神の不一致<sup>⑦</sup>を鋭く感じると同じように自分の肉体の中の「要素の反対の矛盾と敵対する対立物」を感じたのである。

是が非でも結合を探索したい気持ちと分離への過剰な反応は、最後には初めの四章で概略したようにダンの性格と環境、特により偉大な全体から孤立するという付きまとつて離れない感覚に迫り着くのである。第一にこれを包囲されたカトリック少数派の一人としてダンの初期の迫害の経験に帰することもできるし、後に習慣づけられた敬虔さを持つカトリック教会から分離したこと、同じようにこの世での出世がなかなかできなかったことや惨めな結婚生活に帰することもできるのである。それらが

ダンの理解力を越えて望みをかけてみようとしたその種の仕事に加わることになる。現存している教会全てを飲み込んでしまうような教会への強い願望（「親愛なるキリストよ、どうぞ輝かしく明確なあなたの配偶者をわたしに見せてください。」）と「この世という肉体」と結ばれたいと願うことは、明らかにこの自伝的な関心事に結びつくダンの統合させたいと願う本能の実例なのである。「人は一人で一つの島になるのではない」というダンの主張は、書くという自己中心癖とともに取り上げられるが、混ぜ合わせたいという強い欲求とそれを鼓舞したり挫折させたりする逃れられない自我との両方を説明してゐるのである。

## 原注

- (1) T. S. Eliot, *Selected Essays* (1932), 287  
 (2) T. S. Eliot, 'Donne In Our Time', in *A Garland for John Donne*, ed. T. J. Spencer (Cambridge, Mass., 1931), 3-19  
 (3) *Sermons* viii, 106  
 (4) Ramsay, 178-9  
 (5) Browne, *Pseudodoxia Epidemica*, ii 6; Gerard, Herbel, (1633), 351-2  
 (6) D. C. Allen, JEGP42 (1943), 322-42; and Thomas Blount, *Glossographia*, (5<sup>th</sup> edn., 1681), under 'Mummy' 参照。  
 (7) *Divine Poems*, 50.  
 (8) Milton A. Ruggoff, *Donne's Imagery: A Study In Creative Sources* (New York, 1962), 143.  
 (9) *Sermons* vi, 59.  
 (10) *Sermons* ii, 199; viii, 69; *Elegies*, 69; Gosse ii, 191.  
 (11) *Sermons* x, 52.  
 (12) G. M. Hopkins, *Poems*, ed. W. H. Gardner (Oxford, 1956), 147.  
 (13) *Elegies*, 15, 18, 20, 73.  
 (14) *Elegies*, 70.  
 (15) 参照 'Donne and Coins' in *English Renaissance Studies in Honour of Dame Helen Gardner* (Oxford, 1980), 151-63 参照。  
 (16) *Elegies*, 17.  
 (17) *Sermons* vii, 360; x, 116; Gosse I, 219.  
 (18) *Sermons* ii, 81; 参照 v, 347; vi, 116+ and Ramsay, 250-1 参照。  
 (19) *Sermons* ii, 261-2.  
 (20) *Elegies*, 61.
- (21) *Sermons* ix, 274; iii, 112; ii, 212.  
 (22) *Elegies*, 37, 34.  
 (23) *Sermons* iii, 65; iv, 190; viii, 62; x, 52.  
 (24) *Sermons* vii, 280.  
 (25) *Elegies*, 80.  
 (26) *Satires*, 35.  
 (27) *Pseudo-Martyr*, 214, 236; *Elegies*, 60, 63, 41; *Epithalamions*, 17.  
 (28) *Elegies*, 76.  
 (29) *Epithalamions*, 43.  
 (30) *Elegies*, 93.  
 (31) *Elegies*, xlvii.  
 (32) Johnson, *Life of Cowley*.  
 (33) *Elegies*, 63.  
 (34) D. L. Guss, *John Donne, Petrarchist* (Detroit, Mich., 1966), 73-4.  
 (35) *Paradoxes*, 41.  
 (36) *Elegies*, 11.  
 (37) *Satires*, 9.  
 (38) Charles Webster, *The Great Instauration* (1975), 403-11 参照。  
 (39) Gosse ii, 78.  
 (40) *Epithalamions*, 70-1.  
 (41) *Satires*, 26.  
 (42) *Divine Poems*, 52.  
 (43) *Divine Poems*, 29.  
 (44) *Elegies*, 28.  
 (45) *Sermons* vi, 172.  
 (46) *Satires*, 30.  
 (47) *Sermons* vi, 331.  
 (48) *Elegies*, 72.  
 (49) *Elegies*, 79.  
 (50) Ramsay, 206.  
 (51) Tertullian, *A Treatise on the Soul*, ch. 27.  
 (52) Milton, *Christian Doctrine*, Bk. I, ch. 27.  
 (53) Gosse i, 176.  
 (54) Itrat Husain, *The Dogmatic and Mystical Theology of John Donne* (1938), 77-9 参照。  
 (55) *Sermons* ii, 59.  
 (56) *Sermons* v, 172.  
 (57) *Sermons* I, 177.  
 (58) Aquinas, *Summas Theologica*, I, Q. 75, Art. 6; 'The Good Morrow', line 20-1, and Grierson's note 参照。  
 (59) *Paradoxes*, 10.